

米山学友の群像

Yoneyama Alumni in the World



『米山学友の群像』発行に寄せて

ロータリー米山奨学事業は、日本のロータリアンが誇るに足る、日本の全ロータリアンが参加する多地区合同奉仕活動です。これまでに日本の大学・大学院で学ぶ留学生、約1万2千人に奨学金を支給し、優秀な卒業生を社会に送り出してまいりました。

これらの元奨学生(学友)は、それぞれの母国で、あるいは日本や世界各地で活躍して、その土地の発展や国際理解に貢献しています。また、活動の分野は、教育、行政、医学、工学、農学、文学、理学、先端技術、貿易、商事、社会福祉など多岐にわたっています。しかし、このように多くの人材を世界の各界に輩出するという大きな貢献をしながらも、これまで日本のロータリアンは、米山奨学事業を通じて行ってきたことがどのような成果をあげているかについて、情報が少なかった面があるように思われます。社会に巣立った学友諸氏それぞれの努力はもとよりですが、日本のロータリアンの支援の成果もあって、彼らが今日、各方面で活躍していることを知ることができれば、日本のロータリアンにとって大きな喜びであると思います。

そこで、このたび『米山学友の群像』を刊行して、その一端を皆さまにお知らせすることになりました。米山学友の皆さんの活躍ぶりに拍手を送っていただければ幸いです。

2005年6月



(財)ロータリー米山記念奨学会
理事長 島津 久厚

目 次

はじめに

『米山学友の群像』発行に寄せて

1.ロータリー米山奨学事業とは	2
2.データで見る米山学友	4
3.世界で活躍する米山学友	6
● 母国を代表するリーダーとして	6
● ロータリアンとして	8
● 学術・研究分野に貢献	10
● 政治・経済・文化の懸け橋として	12
● 心を育てる教育支援	14
4.学友の“声”傑作選	16
● 人をつくり 世界に尽くす	17
● 矛盾から希望へ	20
● 龍の里で陶芸に賭ける	22
● 米山奨学生としての自分を振り返って	24
5.見守るロータリアンの“声”	26
6.米山学友会の紹介	28

1 ローターリー米山奨学事業とは

民間最大の奨学事業です

(財)ロータリー米山記念奨学会は、勉学、研究を志して日本に在留している外国人留学生に対し、日本全国のロータリー・クラブ会員の寄付金を財源として、奨学金を支給し支援する民間の奨学財団です。

1967年に財団法人として設立の許可を受け、これまでに世界104の国・地域出身の12,706人(2005年5月現在)におよぶ外国人留学生を支援し、今日では、事業規模と採用数において、民間で最大の奨学団体*となっています。

* (財) 助成財団センター発表の助成等事業費上位100財団(2003年度)において、米山奨学会は年間助成額:17億円で第3位、民間主導型財団では第1位となっています。

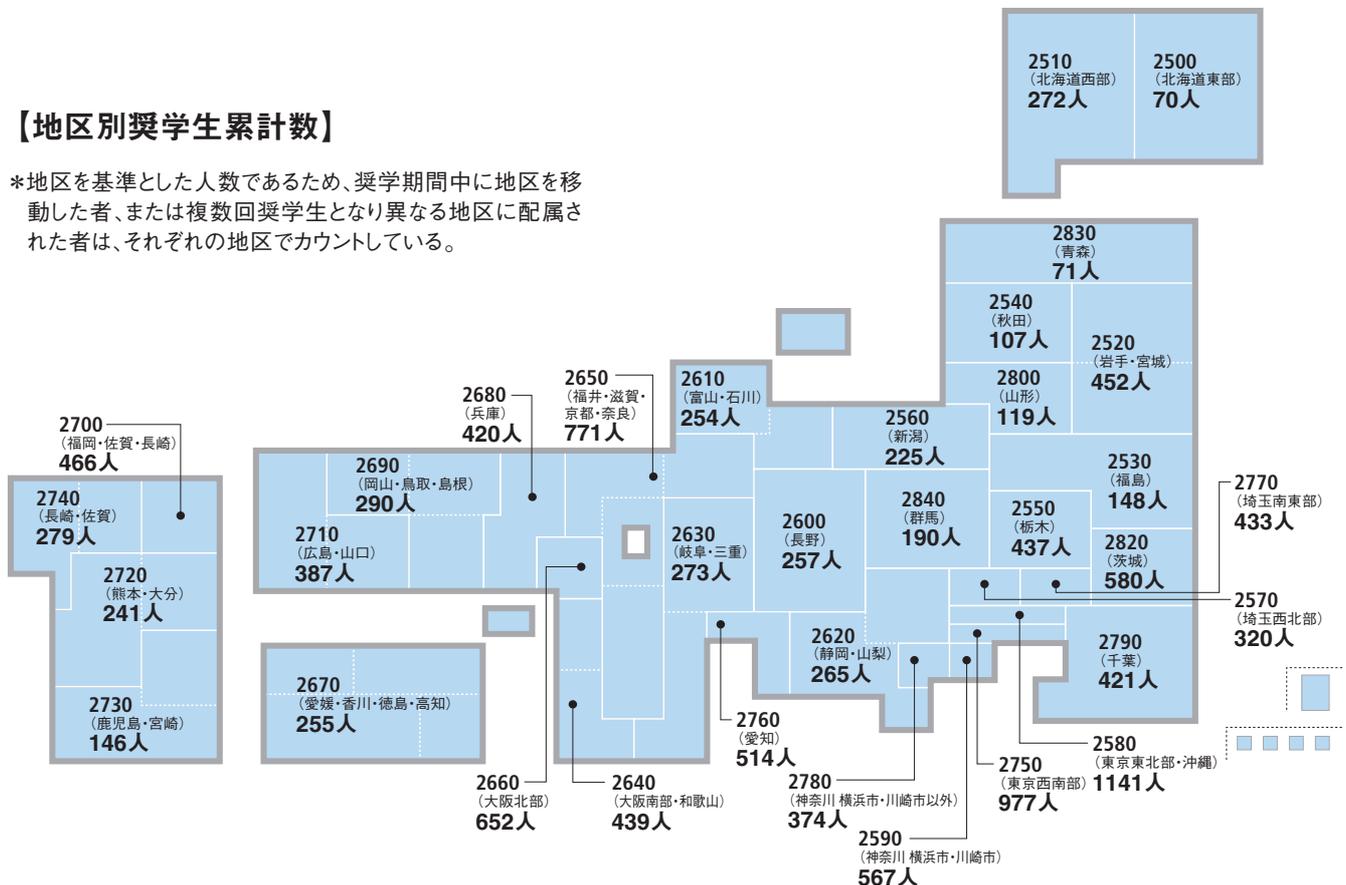
【奨学金の種類と採用人数(2005学年度)】

奨学金種類		内 容	奨学金額(月額)	採用人数
米山奨学金	学部課程(YU)	日本の大学・大学院に在籍する正規留学生対象の代表的なプログラム	10万円	103人
	修士課程(YM)		14万円	318人
	博士課程(YD)		14万円	323人
クラブ米山(CY)奨学金		世話クラブが支える博士号取得のための延長制度	14万円	44人
特別米山奨学金	SY-A	台湾・韓国の米山学友会と連携して行う上級研究者招聘制度	18万円	4人
	SY-S	日本で博士号を取得し、母国で実績を積んでいる元米山奨学生の短期再留学制度	18万円	2人
	SY-1	農業・地域指導者研修支援	10万円	6人
奨学生人数(計)				800人

上記は、2005学年度(4月1日～3月31日)の支給状況です。2006学年度以降は、奨学金種類・金額・人数ともに変更の予定があります。

【地区別奨学生累計数】

*地区を基準とした人数であるため、奨学期間中に地区を移動した者、または複数回奨学生となり異なる地区に配属された者は、それぞれの地区でカウントしている。



「世話クラブ・カウンセラー制度」による留学生の心のケアを重視しています

ロータリー米山奨学金制度の最大の特徴は、経済的な支援だけでなく、「世話クラブ・カウンセラー制度」を設けて、奨学生の精神面のケアを図っていることです。親善・交流を通じた国際理解を推進する米山奨学事業の要であり、ロータリー・クラブという地域密着の組織だからこそできる重要な特性といえるでしょう。

奨学生には、全国ロータリー・クラブのうち1クラブが世話クラブとして選ばれます。さらに世話クラブの会員のの中から、専任のカウンセラーが1人付いて、奨学生の日常の相談に乗ったり、文化体験の案内役や交流の橋渡しに努めたりして、奨学生の日本での生活が心豊かなものに

なるように配慮しています。大学の指導教員と連絡を取り合ったり、自宅に奨学生を招いて家族ぐるみで交流したりする例も多くあります。

奨学生には毎月1回世話クラブの例会に参加することが義務づけられており、奨学金もそこで手渡されます。そのほかにも、奨学生には、ロータリー・クラブの例会で母国のことや自分の研究について卓話（スピーチ）したり、クラブ・地区の社会奉仕活動、交流会や研修旅行に参加したりと、ロータリーの活動を通じて、日本文化や地域社会と触れ合うさまざまな機会が提供されます。

「世話クラブ・カウンセラー制度」は、国費や他の奨学金制度には無い魅力として、留学生はもとより、他団体や大学、行政機関などからも注目されています。



世界の平和を願って始まった奨学事業

米山奨学事業の歴史は、50年以上前にさかのぼります。

敗戦後の復興が続く1952年、日本のロータリーの礎を築いた米山梅吉氏の功績を記念して、東京ロータリー・クラブによって「米山基金」が設立されました。日本のロータリーが国際ロータリーに復帰して3年後、米山梅吉氏がそれを見ずして、奉仕に捧げた生涯を終えてから6年後のことです。米山梅吉氏が生前、東南アジアに深い関心をもっていたことから、ロータリー財団の国際奨学制度に模して、アジア諸国から奨学生を招致しようというのが基金設立の目的でした。そして、2年にわたる募金活動の後、1954年にタイから第1号奨学生となるソムチャード氏しょうへいを招聘したのです。氏は、東京大学で養蚕学を研究し、帰国してからはタイの蚕糸局に入局、タイシルクの増産に貢献しました。

米山奨学金の創設の目的は、日本が再び戦争の過ちを繰り返さない誓いと、世界に“平和日本”の理解を促すことにありました。留学生が平和を求める日本人と出会い、互いに信頼し合う関係を築き、「世界の懸け橋」となることを願ってつくられたのです。



米山基金による
第1号奨学生ソムチャード氏
(1954年)

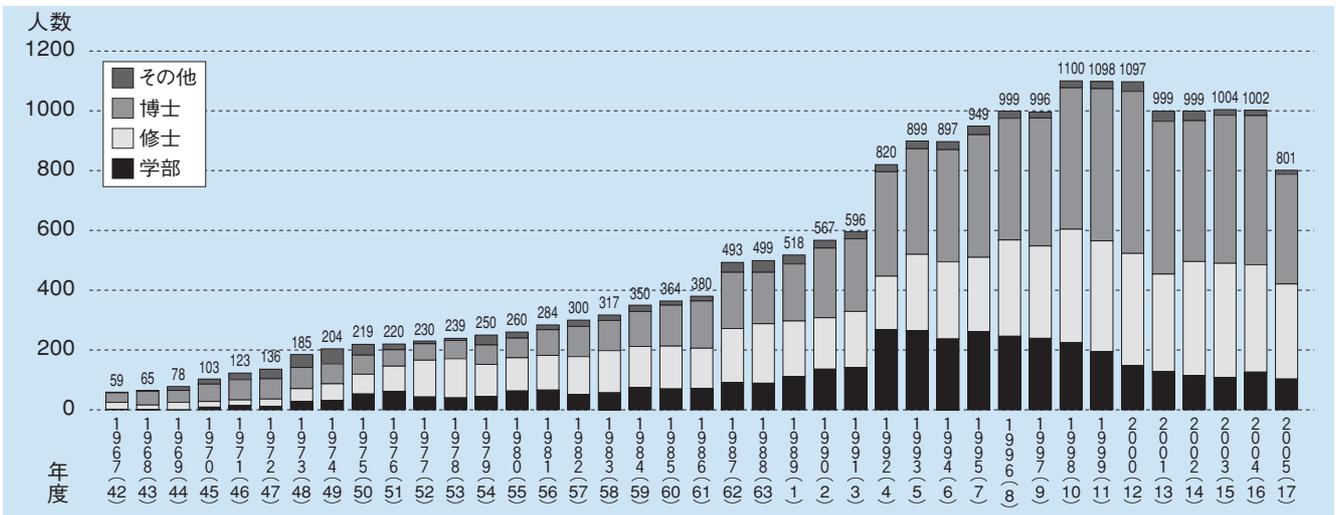


奨学生懇親会(1958年)

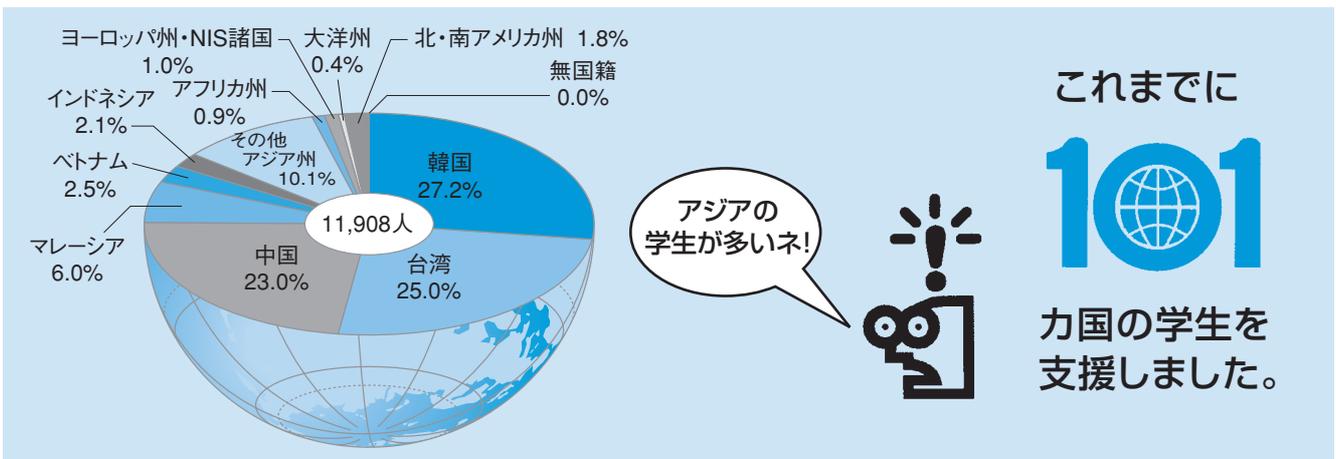
データで見る米山学友

2005年3月末までに卒業した学友11,908人の統計です

1. 米山奨学生数の推移



2. 学友の国籍



3. 世界で活躍する学友





Q1 出身大学BEST5は？

1	東京大学	818人
2	筑波大学	500人
3	大阪大学	389人
4	東北大学	326人
5	九州大学	272人

Q2 博士号取得者数は？(申請ベース)

A 2815人 / 11,908人中
(国外取得者や渡日前取得者を含む)

【博士号取得者の出身国ランキング】

1	韓国	1164人
2	中国	854人
3	台湾	562人
4	バングラデシュ	56人
5	インドネシア	21人

韓国・中国は
大学院生のみ
対象のため、
多くなっています。

【博士号の種類】(米山奨学会独自の分類です)

1	工学	1046件
2	農学	444件
3	医学	430件
4	理学(地球環境・生態科学等)	189件
5	文学	168件

Q3 学友会っていくつあるの？

A 25学友会(国内23、韓国・台湾に各1)

【在日学友会登録数BEST3】(2004年8月現在)

1	東京(2580/2750)	597人
2	九州(2700/2720/2730/2740)	257人
3	神奈川(2590横浜市・川崎市)	220人

Q4 米山奨学生は女性が多いって聞いたけど？

A 学友の62.1%は男性です。しかし、近年では女性の割合が増えて男女半数ずつになってきています。

Q5 学友の現在の職業は？

(米山奨学会独自の分類です)

1	教育	2448人
2	企業	1549人
3	研究所	346人
4	病院	237人
5	官吏	108人

教育関連の仕事
についている人が
多いんだね。



Q6 最初の米山奨学生って？

A ローターリー米山記念奨学会として記念すべき最初の奨学生は、1958年に迎えた8名です。パキスタン(現バングラデシュ)、ベトナム、インドネシア、フィリピン、香港、イラン、セイロン(現スリランカ)、タイの各国から1名ずつでした。

Q7 ローターアンになった学友

A 65人(米山奨学会把握分)

1	台湾	41人
2	韓国	13人
3	インド	2人

学友が作ったロータリー・クラブ

台湾の台北東海RCは、1995年に学友が力を合わせて立ち上げた初のクラブです。日本語を公用語とし、日本との親善交流に尽力しています。

世界で活躍する米山学友

ロータリー米山記念奨学会では、「世話クラブ・カウンセラー制度」に代表される心の通った奨学事業を実現し、これまでに1万人を超える優秀な奨学生を世に送り出してきました。日本のロータリアンを通じてロータリー精神に触れ、心をはぐくんだ米山学友は、いま世界を舞台に活躍しています。

母国を代表するリーダーとして

駐 日韓国大使となった米山学友



崔 相龍(チェ・サンヨン)氏

(韓国/1969-72/東京大学大学院/東京日本橋RC,東京城西RC)

2000年2月から2年間、駐日韓国大使を務めた。現在は、韓国で100年の歴史をもち、「韓国の早稲田大学」と評される名門私立大学、高麗大学の教授。1998年2月の金大中大統領訪日時には、日韓共同宣言をつくる過程で政治学者として貢献するなど、新しい日韓の交流に大きな役割を果たしている。

友情がパワフルな時代

友情は優れた政治的資源

大学教授として直行便で大使になったのは、おそらく私が初めてだと思います。私には今までの大物政治家のようなパワーも経験ありません。私のもっている唯一の資産といえば、日本人との友情です。友情は今、非常にパワフルです。冷戦時代は軍事力やイデオロギーが国と国との関係に大きな役割を果たしていましたが、冷戦時代が壊れてからは経済、文化、友情が、非常に優れた政治的資源となっています。

金大中大統領の訪日と歴史認識

1998年の金大中大統領と故小渕恵三前総理大臣とのふれあいは、今の日韓関係の新しい出発でした。私は当時、この新しいパートナーシップ日韓共同宣言を作る過程で、学者としてお手伝いをしました。

1番障害となったのは、やはり歴史問題でした。歴史認識には、過去の歴史的事実を確認することと、その確認された歴史的事実を解釈することの2つがありますね。後者は多様です。日本人も韓国人もそれぞれが自分の歴史観なり、人生観なりで歴史を解釈します。しかし前者の場合、事実は動かないのです。過去の事実はそのまま確認して、良い事実は共に分かち合い、悪い事実は教訓にし、未来志向でいこうということで、両首脳の合意がなされました。そこから新しい文化交流が始まったのです。

韓国と日本の違いを尊重する

韓国と日本は儒教を受け入れた背景は似ていますね。しかしその儒教を受け入れた容器と中身が非常に違うのです。その認識が、韓国人も日本人も足りない。たとえば同じ儒教を受け入れても、韓国は科挙制度を採用しました。学問と政治の距離が近いのが特徴です。一方、日本は侍という指導的グループが儒教の規範を身につけた伝統がありました。その違いからくる韓国人と日本人の価値観と行動様式の違い、その違いへの相互理解が必要な時期に我々は来ています。あまり類似性ばかり強調すると、争ったり競争したりします。特に文化的違いの尊重が必要なのです。

私が大学で外交を学んでいた当時の教科書であるニコルソンの著作では、外交官は常に国家を中心にものを考えとありました。しかし時代はもう、ニコルソンの時代ではありません。外交も原則的には平和の実践であり、外交関係は人と人とのふれあいだと思います。その積み重ねの中に、友情ができ、共同作業をし、お互いの信頼が出てくる。単なる国家利益ではなく、両国民にとってもプラスになることを求めていくのが、21世紀の外交の課題ではないかと思っています。

本稿は、2000年8月30日の理事会・評議員会の折に開催された崔相龍駐日韓国大使(当時)歓迎昼食会での講演要旨であり、「ロータリーの友」2000年11月号に掲載されたものです。

日本国より叙勲を受けた米山学友



チャンドラシリ・フェルナンド氏

(スリランカ／1982-84年／東北大学大学院／仙台西RC)

国費留学生として来日後、1982-84年に米山奨学金を受けて、東北大学大学院にて公法学を学び、修士号を取得。帰国後は、スリランカ警察庁に入り、現在は警察庁長官の重職にある。日本・スリランカ間の警察協力推進に寄与したほか、コロンボ市の治安が悪化した際には、在留邦人の保護のために情報提供や警備指導に尽力した功績で、平成15年度秋の叙勲で、日本国より勲三等旭日中綬章を授与された。

『もし、米山奨学金の支援が無かったら、日本での勉学を続けることもできず、このような荣誉ある勲章を受けることもなかったでしょう。支援して下さった日本のロータリーの皆様に、心から感謝いたします』

(チャンドラシリ・フェルナンド)

寄稿文

コロンボの鬼平

日本YMCA同盟 野崎 威三男

2000年8月から1年余り、日本予防外交センターから事務所設立のためにスリランカへ派遣されたときに知り合ったのが、チャンドラ・フェルナンド氏 (Mr.Chandrasiri Fernando) である。当時、チャンドラさんは警察庁副長官で、日本大使館の法律顧問もしていた。1979年に文部省の国費留学生として来日し、東北大学法学部に入学した。その後、修士課程に進み、法学部阿部研究室に学んだが、その折にロータリー米山奨学金を受けたと言う。

じっくり話す機会が多々あったが、会えば会うほど日本人以上に日本的だと感じさせられた。チャンドラさんはよく「自分の人格は東北大学法学部で形成された」と述懐されていた。旧帝大の良き伝統を受け継ぎ、厳格で古武士然としたところがある。反政府軍との戦闘の指揮を執った歴戦の勇士である一方、法律家として人権問題を重視し、「社会の最前線の人々との接点となる警察官こそが、公平・公正・正義を貫かなければ平和構築はできない」と、警察官への人権教育・普及に熱心だった。厳格でありながら人情に厚く、部下の絶大な信頼を得ていた。スリランカ滞在中、私たち夫婦はチャンドラさんのことを「コロンボの鬼平」と呼んでいた。チャンドラさんは「自分が今あるのは日本留学のおかげで、日本人に大変

お世話になった。したがって、スリランカ在留邦人が困っていれば手助けするのは当然」と、日本人のお世話を良くされていた。恐らく法律問題・労働問題でチャンドラさんのお世話になった日系企業は多いと思う。こうした貢献が認められ、2003年に日本政府より勲三等旭日中授章を授与された。

現在、チャンドラさんは警察官のトップに登り詰め、警察庁長官として超多忙である。スリランカでは陸軍・海軍・空軍・警察のトップは同格だが、チャンドラさんは衣食住に無頓着で、生活は質素である。「お金さえあれば本を買うし、海外出張でもお土産は自分の専門書が多い」と奥さんが笑っていたように、学究肌の人である。激務のかたわら博士号の取得をめざして準備に余念がない。

チャンドラさんのような人が開発途上国にはたくさんいると思う。それにつけてもロータリアンの皆さんは米山記念奨学会を支えることで、言ってみれば将来の種まきをしているのである。種をまかなければ花は咲かない。チャンドラさんのような花が咲けば、楽しいではないだろうか。ぜひ種まきをしていただきたい。それがひいては日本の将来にも大きく貢献するのである。

ロータリアンとして

米山学友初のガバナーであり、「超私の奉仕賞」受賞者



林 隆義氏

(韓国／1977-78／京都大学／京都西南RC)

ソウル市の恵聖総合病院院長。ソウル麻浦RC会員。カザフスタンの核実験によって白血病に侵された人々のために、国境を越えた奉仕活動をしている。1994-95年度国際ロータリー「超私の奉仕賞」受賞。1997-98年度には、米山学友として初めて国際ロータリー第3650地区のガバナーを務めた。韓国米山学友会の初代会長(1989-97)でもある。

史上2人目、台湾では初の米山学友出身ガバナー



許 國文氏

(台湾／1975-77／徳島大学／徳島RC)

台湾・羅東市の羅東博愛病院副理事長。羅東西RC会員。第3490地区(台湾)の2005-06年度ガバナーに就任する。2005年2月アメリカ・アナハイムで行われた国際ロータリーの国際協議会では、日本人以外でただ1人、日本語セッションに参加。積極的に議論にも加わって、日本のガバナー・エレクトとの交流を大いに深めた。

『日本人にとって、台湾はもともと親しみ深い国ですが、「台湾のガバナー・エレクトが元米山奨学生である」ということは、まったく質の異なった連帯感を生みます。巣立った奨学生が同じ仲間として、同じ目標をかかげて母国の地区の運営をするまでになる、というのは、どれほど日本のロータリアンにとって事業の意義を身近に感じられることか。まさに、米山奨学事業の果たしてきた成果、事業の成長を実感できる大ニュースだと思います。』

(国際協議会の研修リーダーを務めた川尻政輝バスターガバナー)

母国を代表する実業家で、米山学友を中心にロータリー・クラブを設立



徐 重仁氏

(台湾／1976-77／早稲田大学大学院／平塚RC)

台湾セブンイレブンを統括する台湾最大の流通企業、統一超商株式会社の代表取締役社長。1999年には台湾のSMART誌で「最も投資価値がある企業家」に輝く。1995年に台湾の米山学友を中心に、台北東海RCを結成し、初代会長に就任した。また、台湾の米山学友会として、社団法人中華民國扶輪米山会を立ち上げ、初代理事長を務めた。

4 00件もの国際的人道的プロジェクトに参加、「超私の奉仕賞」受賞者



黄 志雲 (アンドリュー・ウオン) 氏

(連合王国／1976-78／岐阜大学大学院／各務原RC)

アンディーズ・クリニック院長。東京城西RC会員。ロータリアンとして、また医師として、数々のボランティア活動に参加。国際ロータリー1995-96年度「家庭および地域社会に対する奉仕のためのRI会長賞」受賞、1998-99年度「超私の奉仕賞」受賞。黄氏が米山奨学生になったのをきっかけに、兄弟6人全員がロータリアンとして活躍している。

ロータリアンとして世話クラブとの交流を深める



黄 紀強 (ウィ・チャー・キョン) 氏

(マレーシア／1985-87／専修大学／藤沢RC)

日系企業(Sony EMCS Malaysia Sdn.Bhd.)のIT部門で、General Manager(統括部長)を務める。国際ロータリー第3300地区Kajang RC会員。世話クラブの藤沢RCとKajang RCとの交流を進め、自身がクラブ会長を務めた2003-04年度には、創立50周年を迎えた藤沢RCと、両クラブの友好関係を記念した「藤沢Kajangロータリー奨学金」を創設。この奨学金では、マレーシアの大学・大学院で、森林および環境保護について研究する学生に奨学金を支給するとともに、カウンセラー制度も導入している。ロータリアンとして、数々のプロジェクトを通じて精力的に活動している。

『米山奨学金のおかげでロータリーを知り、藤沢RCの皆さんとの交流で、自分の人生が変わりました。カウンセラーの小島正幹氏は、私を家族の一員のように受け入れてくださり、以来、20年にわたり、お付き合いが続いています。米山奨学金をいただいて勉強していた私が、今度は奨学金を与える立場になりました。それは、米山奨学金の意義に沿ったものであろうし、ロータリアンになる人を育てるのも、米山奨学金の本来の目的ではないかと思えます。米山学友として、今後、多くの学友にも呼びかけて、ロータリアンになっていただきたいと思っています。』 (黄 紀強)

立大学法学部教授にして、2004年からロータリアンに



張 紅 (チャン・ホン) 氏

(中国／1992-95／広島大学大学院／広島RC)

広島大学大学院で博士号を取得後、北京大学、東京大学先端科学技術研究センター研究員を経て、岡山大学法学部教授に就任。2004年春に岡山西RCに入会した。

『人格形成期は、純粋で未熟だからこそ、異文化に対しては貪欲で、吸収するのも早いです。私もそういう時期に、ロータリアンと出会いました。自分にとって、その一番大きな意味は、人生をどのように形成し、自分でマネジメントしていくか、それを真剣に考えることを学ばせてもらったことだと思います。』 (張 紅)

学術・研究分野に貢献

「医療と法」日米比較研究の第一人者



ロバート・B・レフラー氏

(アメリカ合衆国／1973-74／東京大学／東京神田RC)

アメリカのアーカンソー大学ロースクール教授。ハーバード大学在学中に、故ライシャワー博士の授業を聴講して、日本に興味を抱いたのが留学のきっかけだった。ロータリー財団の奨学金と米山奨学金を受けて東京大学で学び、現在も、東京大学との共同プロジェクトにおいて、日米の医療過誤訴訟の比較研究に取り組んでいる。

「和」を尊ぶ日本の心を伝える」建築家、都市計画研究者



ノアイン・アマリア・ギンゾ氏

(ベネズエラ／1998-99／千葉大学大学院／千葉港RC)

国立ベネズエラ中央大学建築学部の研究所で都市計画研究に携わる。大学院課程のコーディネーターや修士課程の教授も務めるとともに、フリーの建築家として庭園の設計にも才能を発揮。同大学構内には、学生たちと作り上げた日本式の坪庭があり、南米のまぶしい太陽の下、日本の伝統文化と調和の心を伝えている。

『日本で学び生活した7年間は、私の人生を根底から変えました。日本人の自然観や精神世界を知ることによって、多様なものと調和して暮らすことの大切さを学び、人として成長できたと思います。「発展しようとする国は、まず教育を重視しなければならない」ということも、日本に留学して強く感じたことであり、母国の教育レベルの向上に努めたいと思います。』
(ノアイン・アマリア・ギンゾ)

研究と奉仕の日々



ジョン・タウィア・アドマコ氏

(ガーナ／1992-04・2002／岐阜大学大学院／岐阜東RC・岐阜エトスRC)

ガーナの国立機関である土壌調査研究所の上級研究員として、JICA(国際協力事業団)を通じた日本・ガーナ両国政府共同の農業プロジェクトに参画し、母国の発展に尽力している。米山奨学期間中に触れたロータリー精神に心から感銘を受け、ガーナでは、さまざまなボランティア組織の立ち上げや運営に積極的にかかわり、経済的な理由から進学を断念せざるを得なくなった娘の友人に、高校卒業までの学費を援助するなど、奉仕を実践している。2002年には、母国で実績を積んだ元米山奨学生の再留学プログラム、SY-S特別米山奨学金に合格して、再来日。岐阜大学大学院で研究の最終段階に奮闘している。

新しいエイズワクチンの開発研究に励む



張 曉燕氏

(中国／1997-99／京都大学大学院／京都洛南RC)

中国衛生部の直轄機関である中国疾病予防控制中心(コントロールセンター)の性病・エイズ病予防センターに所属し、新型エイズワクチンの開発研究に携わる。アメリカ国立衛生研究所との共同研究マネージャーとして、研究協力・交流、予算やレポートの作成など、忙しくも充実した毎日を送っている。

『海外で学び、研究者・教育者となった私にとって、若い学生や研究者たちと話す時間は、欠かせない生活の一部になっています。安い助成金で生活を支え、実験に明け暮れる彼らの苦労話を聞くにつけ、中国でも米山奨学金のように若い研究者を支える組織ができればと思います。同時に、彼らを含めて、私の周りの人たちに、日本には平和を愛する親切な人がたくさんいて、中国人と良い関係を築くことを願っていることを伝えていきたいと思っています。』

(張 曉燕)

インドネシアの日本語教育の充実に向けて



アグス・スヘルマン・スルヤディムリア氏

(インドネシア／2000-01／名古屋大学大学院／名古屋東山RC)

名古屋大学で文学博士号を取得して帰国後、インドネシアで最も古い日本語教育の歴史をもつ母校のパジャジャラン大学の日本語教員として復職。それと同時に、パジャジャラン大学日本語研究センターの所長に就任して、日本語・日本文化の研究を続けている。

上海でラジオの日本語講座番組を担当



徐 敏氏

(中国／1991-93,01-02／筑波大学大学院,国立国語研究所／取手RC,東京田無RC)

華東師範大学日本語学部主任教授。華東師範大学は累計5,000人以上の日本語能力検定受験者を輩出。徐氏が編集した日本語リスニングテキストは、上海でラジオ日本語講座テキストに採用され、番組も担当。2001-02年には、SY-S特別米山奨学生として採用され、再度来日し、国立国語研究所にて研究した。

中央が徐 敏氏

進気鋭の若手建築士、東大総長賞、ベトナム建築学会作品賞など数々の賞に輝く



ヴォ・チョン・ギア氏

(ベトナム／2003-04／東京大学大学院／東京小石川RC)

東京大学土木工学科の修士学位論文発表会では、「風を取り入れた建築」をテーマに、外国人として初めて最優秀論文に選ばれた。現在、日本の有名な建築家であるNaito Hiroshi氏の元で博士号の取得を目指し、研究に励んでいる。2005年3月には東京大学総長賞を受賞。また、ベトナム建築学会作品賞(商業建築部門)、ベトナム建築学会若手建築家賞など、母国の学会でも高く評価され、注目されている。

政治・経済・文化の懸け橋として

トングの魅力のアジアに伝えたい



エレノア・セニティラ・フォヌア氏

(トンガ／2003-04／長崎国際大学／ハウステンボス佐世保RC)

トンガの労働通商産業省の管轄下にある政府観光局でTourist Officerとして勤務。母国の需要産業である観光を通じて、日本と関係する仕事を続けて、トンガと日本を結びつける役割を果たすことが夢。2005年日本国際博覧会(愛・地球博)にはトンガも正式参加。企画・準備段階から担当し、2005年3月から9月まで再来日して、万博会場の南太平洋共同館においてスタッフとして対応にあたっている。

夢を実現して外交官に



イゴル・ドウコスキ氏

(マケドニア旧ユーゴスラビア共和国／1999-2001／中央大学大学院／東京八王子北RC)

中央大学で国際政治学の修士号を取得。帰国後、念願かなって2002年にマケドニアの外務省に入省。安全保障担当部局の参事官として、マケドニアの外交政策の要となるNATO(北大西洋条約機構)との協力体制確立に励む。

シンクタンクの研究者として、米山学友会会長として、「真の懸け橋」を追求



林 保順(リム・ポースーン)氏

(マレーシア／1991-93／千葉大学／千葉西RC)

米山奨学期間後、一橋大学大学院に進学し、商学博士号を取得。卒業後は、三菱総合研究所海外開発事業部に研究員として勤務。現在は、日本企業や政府のコンサルタントとして、アジアを対象とした研究調査を通じて、主に人材育成、教育、ODA評価などを行っている。第2790地区(千葉県)米山奨学会学友会の会長としても活躍。大学の留学生センター教授や留学生支援団体の代表を招き、討論会を企画するなど活発な活動を行っている。

日本の文学作品の若手翻訳家



金 堉我氏

(韓国／2001-03／専修大学大学院／川崎高津南RC)

母国の大学で日本語や日本文学について教えるかたわら、日本の文学作品の翻訳家としても才能を発揮。2004年11月に、初めての翻訳書として、重松 清氏の『日曜日の夕刊』が韓国で出版され、好評を得た。2005年5月には、同じく翻訳を手がけた辻 仁成氏の『代筆屋』(韓国でのタイトルは『辻 仁成の手紙』)が発刊された。また、同年5月に始まった辻 仁成氏と韓国の女性作家、孔枝泳(コン・ジョン)氏との共同連載でも辻作品の翻訳を担当。この連載では単なる翻訳のみにとどまらず、二人の作家の文化的ギャップを調整する役目も果たしている。金氏自身が出版した『在日朝鮮人女性文学論』(作品社・2004)も、朝日新聞・毎日新聞など全国紙の書評欄で取り上げられた。

キルギスと日本の経済交流推進をミッションに



バケットベク・アサノフ氏

(キルギス／2002-03／岩手大学大学院／盛岡北RC)

2004年4月に東京にキルギス大使館が開館したのを機に、在日キルギス大使館の経済担当官として、主にキルギスと日本の経済交流、投資誘致活動のほか、大使のアシスタントとしての仕事に従事している。

『日本でまだあまり知られていない小さな山岳国キルギスを紹介するには努力が必要です。投資環境では、1999年の邦人誘拐事件の影響もまだ残っています。それらを少しずつ、産業界やメディアとのネットワークをつくり、良くしていきたい。これまで日本の社会に在る間に学んだことをすべて生かし、母国と日本の、特に経済面での関係を強化していくことが私のミッションと信じて、全力投球する毎日です。』
(バケットベク・アサノフ)

日展入選ほか数々の受賞歴をもつ新進彫刻家、世話クラブが協力して個展開催も



陳 漢 (チェン・ハン) 氏

(中国／2000-02／埼玉大学大学院／桶川イブニングRC)

埼玉大学在学中、埼玉県美術展で県知事賞に輝いたのを機に、その後も日展入選のほか、安田火災美術財団奨励賞、同新作秀作賞、アサヒビール芸術文化財団美術展最優秀賞など、数々の賞を受賞。現在は、東京芸術大学大学院美術研究科で彫刻専攻中。米山奨学期間中の2001年には、日展初入選を機に、世話クラブの桶川イブニングRCが主催して、初の個展となる「陳漢彫刻・洋画展」を開催。4日間の開催で、400人近い来場者を集めた。

『米山奨学生となって、世話クラブの例会に月1回参加し、カウンセラーの染矢正文さんたちと日常的に接するようになって、私の生活は大きく変わりました。それまで、外国人であるから、日本の社会では、トラブルを起こさないように、また、巻き込まれないよう、遠慮がちに暮らしてきました。しかし、まわりのロータリアンの人たちは、私を1人の人間として尊重し、惜しみなくさまざまなバックアップをしてくれました。個人的なお付き合いでも、できるだけ日本の社会に溶け込むように、後押ししてくれました。米山奨学金を得た2年間で、彫刻家として大きな飛躍を遂げることができました。豊かで充実した時間。温かく思いやりにあふれる人たちの心からの後押しが、10を超える作品制作の最大のエネルギーとなりました。皆さまへの心からの感謝と新たな峰への挑戦の決意をメッセージとしてお伝えしたいと思います。』
(陳 漢)

(株)エピック・ジャパン発行・エピックワールド誌 No.48 (2005 Spring) 号より

タイ国最大の日本語学校の校長として



パチャリー・チンプラサートスック氏

(タイ／2002-03／お茶の水女子大学大学院／東京紀尾井町RC)

国際交流基金バンコク日本語センターの専任講師を経て、2005年4月から、タイを代表する日本語教育機関である泰日経済技術振興協会(TPA)附属語学学校の校長に就任。TPAは、1973年に日タイの友好発展強化と日本からタイへの技術移転を目的として、タイの元日本留学生が中心となって設立した公益団体で、日本語教科書の出版・翻訳事業、語学学校の運営などを行っている。附属語学学校の学習者は1年間に約9,550人(延べ人数)と、タイでは最大規模を誇っている。

心を育てる教育支援

バングラデシュの教育振興に力を尽くす



イスカンダール・アメッド・チョウドリ氏（故人）

（バングラデシュ／1970-72／東京外国語大学／東京銀座RC）

母国の教育振興に強い使命感と情熱をもち、故郷のベタギ村の学校再建に尽力した。国際ロータリー第2770地区（埼玉県南東部）の多大なる支援を得て再建された学校は、ロータリー・ベタギ・ユニオン・ハイスクールと改名されて、現在も地域の教育の場として重要な役割を果たしている。次なる段階として、職業訓練校の設立にも着手していたが、心臓病のため、道半ばで2004年1月29日にバングラデシュで永眠した。

なお、チョウドリ氏は、国内最初の米山奨学会学友会である関東学友会（現東京学友会）の初代会長を務めた。

モンゴルに日本スタイルの学校設立



ジャンチブ・ガルバドラッハ氏

（モンゴル／1998-99／山形大学大学院／山形北RC）

新モンゴル高等学校校長。帰国後、首都ウランバートルに、モンゴル初の3年制高校「新モンゴル高等学校」を設立した。国際水準である3年制のほか、部活動や課目選択制などモンゴルになかった学校制度を導入。山形県・宮城県を中心とした市民活動団体「柱一本の会」など、多くの団体が設立とその後の活動を支援している。

ラオスの識字教育、情操教育と女性の自立支援に取り組む

チャンタソン・インタヴォン氏

（ラオス／1983-86／東京都立大学大学院／東京銀座RC）

特定非営利活動法人「ラオスのこども」代表。ラオスの子供たちに絵本が身近となるよう、作家や画家を育成しながら、数多くの図書を出版し、ラオスにおける識字教育、情操教育の普及に取り組んでいる。また、ラオスにおける収入のない女性の自立を助けるために「ホアイホン職業訓練センター」を開設し、代表をつとめる。1999年、毎日国際交流賞受賞。また2000年には、ラオスの子どもや女性の人権改善への継続的な取り組みが評価され、アジア人権基金のアジア女性人権特別賞を受賞。2003年に日本の外務省がASEAN年を記念して制作したビデオにも登場した。

ネパールに女性の職業訓練所を開設



アルチャナ・シュレスタ氏

(ネパール／2001-02／鈴鹿国際大学／鈴鹿西RC)

卒業後に帰国し、女性の地位向上のための職業訓練所を開設。この「ルーザー（日の出）・トレーニングセンター」では、手に職をつけて自立を目指す多くの女性が、ミシンの縫製や刺繍、美容・理容技術を習得している。最も自立を必要とするカースト下層の女性は、貧しさ故に授業料が払えず、入所の希望が叶わないため、現地パタン市のラリトプールRCを通じて、このような女性たちが無償で学べるための支援を、鈴鹿地区のロータリー・クラブに要請。これに応じて、第2630地区（岐阜県・三重県）の鈴鹿・鈴鹿西・鈴鹿ベイ・鈴鹿シティ・亀山の5ロータリー・クラブが、現地のラリトプールRCとツインクラブの締結をし、3年間の支援を約束した。

『ネパールの女性の地位向上のために役立ちたい、これは私が日本留学を通じて得た夢です。留学中お世話になったいろいろな方に、「帰国したら人のために役立つことをするんだよ」と励まされ、いつしかそれが私自身の夢になりました。本業とする日本語の通訳・翻訳業、そして日本語教師としての収入のほぼすべてをつぎ込んで、ルーザー・トレーニングセンターを開所することに親兄弟さえも反対しましたが、私は迷いませんでした。いろいろな困難を乗り越えてここまでやってきましたが、今回、世話クラブの鈴鹿西RCをはじめ、鈴鹿・亀山の5ロータリー・クラブからの温かいご支援をいただけることになり、本当に感謝しています。これから、いろいろなトレーニングを行って、女性の活動の場を広げていきたいと考えています。』

(アルチャナ・シュレスタ)



日本留学を目指す母国の学生を支援するためのNPO法人を立ち上げ



メスット・シェネル氏

(トルコ／2003-04／筑波大学大学院／岩井RC)

起業して自らの会社を興すと同時に、NPO法人 日本トルコ育英会を立ち上げた。日本に留学を希望するトルコ、中央アジア各国からの優秀な学生に対して、日本での修学機会を与える奨学金を支給している。また、トルコ文化を紹介する音楽コンサートを企画したり、母国で高校生・大学生に日本留学の魅力を紹介するセミナーを開催したりと、日本とトルコ・中央アジア間の文化交流を深めるために、多彩な活動を行っている。2005年1月から、米山奨学会も会員となっている留学生奨学団体連絡協議会（JISSA）にも入会して活躍中である。

4 学友の“声”傑作選

これまで、『ロータリーの友』よねやまだより誌上や地区・クラブでの卓話で、特に好評を博した米山学友の“声”をご紹介します。人生における日本留学の意義、将来への抱負、交流を深めたロータリアンへの思い……。彼らの言葉の中に、日本のロータリーが米山奨学事業を通じて追求する国際奉仕の本質と、その成果が見えるのではないのでしょうか。

このような学友をこれからも輩出していくことが、米山奨学事業の目的です。



人をつくり 世界に尽くす

～米山奨学会が目指す知的国際貢献とは～



1983年に文部省(現文部科学省)が「留学生受け入れ10万人計画」を発表してから今年で20年、一応の数値目標は達成されましたが、ようやく先進諸国の仲間入りを果たしたといえる水準です。これから先、留学環境の質を高め、世界中からいかに優れた学生を日本に引きつけるかが課題とされています。そのような現況において、今回は、米山学友、大学の指導教員、ロータリアンという異なる立場の方々にお集まりいただき、米山奨学事業の目標であります「知的国際貢献」としての役割について考えてみたいと思います。

■出席者

米山学友
名古屋大学

法政国際教育協力研究センター研究員
2000-02年度米山奨学生
(カンボジア出身/世話クラブ・岡崎東RC)

コン・ティリ

指導教員

名古屋大学

法政国際教育協力研究センター教授
法学博士

鮎京 正訓

ロータリアン

米山記念奨学会広報委員

北里 桂一(伊丹有明RC)

司会

米山記念奨学会常務理事・事務局長

宮崎 幸雄(東京RC)

留学先としての日本の魅力

宮崎 ティリさんは、法律を勉強するために日本に留学されたんですね。

ティリ 私はカンボジアの国連人権センターに勤めていたのですが、母国の一番の問題は法治国家でないことであると考え、法律の勉強をしたいと考えていました。母国にはまだ大学院がなかったので、アメリカ留学を考えていたところ、仕事で鮎京先生と知り合ったのを機に日本留学を決めました。

愛知県の奨学金を2年半もらえることになって、名古屋大学大学院に入学しました。修士号を取ったら帰国して、また人権センターに戻ろうと思っていたのですが、先生方の勧めもあり、博士課程に進学しました。

鮎京 1979年、4年に及ぶポル・ポト支配が終わったとき、カンボジアで生き残った法律家はたった7人でした。新しい時代になって、法律がないこと以上に深刻だったのは、法律をつくれる人、運用できる人が全くいないことでした。それで、たまたま知り合ったティリさんが法律の勉強をすることは、あの国の今後非常に重要だと判断しました。才能ある人には思う存分博士課程でやってもらいたい、進学を勧めましたが、問題は奨学金が切れたことでした。そこを救ってくれたのが米山奨学金で、そのおかげで彼は今日まで勉強することができたのです。

宮崎 これまでの経過を踏まえ、あなたにとって日本は理想的な留学先と言

えますか。

ティリ 地理的にはそうですね。アジアにあるので移動しやすいですし、大学の選択肢が多いことからアジアが一番理想的と言えるかもしれません。

北里 ここに国際貢献の方向が見えてくるのですが、米山奨学会からみると、今は中国からの留学生がすごく多いのです。商法や経済法にかかわる具体的な勉強がしたいという学生が多いのです。なぜかという、中国ではそういう法律が未整備で、つくらないと経済活動ができないわけですよ。

宮崎 欧米の法律と比べ、日本の法律は、カンボジアを含めアジアの発展に役立つものなのでしょうか。



コン・ティリ氏

鮎京 日本の法律は、単に一つの法体系ではなく、明治以降はフランス法やドイツ法、第二次大戦後は、アメリカとイギリスのものも受け入れています。そういう意味では、日本の法律家というのは、世界のさまざまな法律に精通していると言えます。今後、市場経済化を進めていく、あるいは安全を確保していく、その場合の法整備に日本の法律学は役立つと確信しています。

留学後、世界にどう貢献するか

宮崎 ちなみに、ティリさんが学位を取るのにあとどのくらいかかりますか。

鮎京 ティリさんは極めて優秀な方ですので、私たちのセンターの研究者と

して、法整備支援の研究を続けていただいています。ごく近い将来に必ず学位を取られると確信しています。

北里 その後は先生として願うこともあるわけですね。

鮎京 もちろんその可能性もあります。

宮崎 米山奨学金の目的では、かつては皆それぞれの国に帰って、母国の発展に尽くすことが大きなポイントでしたが、今はそれが変わってきました。将来、いかに世界に貢献できるかというところに視点を広げているんです。そのことについて、あなたはどのように考えていますか。

ティリ 発展途上国の問題は、留学後に帰国した人に実力があってもバックアップがないことです。海外で学んだことを生かし、例えば公職に就いて何かをしたいと思っても、十分な給料ももらえない。まず安定した生活を確保できないことが問題です。それで結局、腐敗の社会、つまりは途上国共通の官僚社会の構造に入り込んで、自らも同化してしまうのです。

宮崎 いっそのこと母国には帰らないで、給料の高い留学先に残った方がいいという考えもありますが。

ティリ それもまた問題ですよ。帰国したら留学先とはそれまで、留学先で就職したらそのまま母国とは縁を切るというのを、両極端な選択として挙げるならば、私は、その中間の道をとることが途上国への支援として最良であると考えます。

私は、向こうの友人たちと一緒にカンボジアに大学をつくっているのですが、海外からどういう形で現地の大学を引っ張っていけるかを考えています。その学生を将来留学させたり、海外に出なくても外国の先生と交流できるようにしたいと思っています。

北里 これからは、日本に残りたいと



北里 桂一氏

望む留学生の進路も考えなくてはならないでしょうね。その一つとしてターゲットにすべきは教育界ですよ。そこにティリさんのような人たちを入れていくことは、日本の教育の活性化につながるのではないかと思います。

留学生が与えるインパクト

宮崎 彼が来たことによって、研究室の学生や教授に影響はありましたか。

鮎京 ティリさんをはじめアジアから留学生が来るようになって、名古屋大学法学部では、学生が「SOLV」という会を結成しました。School of Law Volunteer Circleの略で、留学生の日常的な世話をするボランティアサークルです。例えば、アパートを一緒に探してあげたり、不用品のバザーを開いて、冷蔵庫なんかを1,000円ぐらいで売ってあげたりしています。そういう中で日本人の学生のアジアへの見方、考え方がガラッと変わったということがありますね。

北里 それはすばらしいことですね。

鮎京 ベトナム研修旅行でハノイ法科大学の学生と交流の機会をもったとき、「なぜ法律を勉強しますか」という質問に日本の学生たちははっきりと答えられなかった。ところが、ベトナムの学生は法律を学ぶ目的がはっきりしています。それを聞いて自分も何とかしなければと思った、とかですね。

北里 かつて日本の学生が刺激を受けているんですね。それは世界へ目を向けるきっかけにもなりますね。

鮎京 本当にそう思います。学生たちだけでなく私たちも刺激を受けています。例えばカンボジアのように、法律がないというのはどういうことなのか、「法とは何か」という根本にかかわることで、そのインパクトというのはやはりすごかったと思います。

私たちも変わるということ

宮崎 日本の留学生受け入れには古い歴史があって、南方特別留学生なんていうのは、当時の大東亜共栄圏を広げる国策として留学生を招聘したんですね。



鮎京 正訓氏

北里 最初から言いなりになる留学生を育てていくものでしたね。だから、それを警戒するという話も出てくるのですよ。日本でリーダーシップを取っている人たちには、戦中あるいは戦前派の人も多い。アジアからの留学生に対する考え方は、今の若い世代とは随分違います。温情主義とでもいうのかな。「私たちは成功して金持ちだ。あなたたちは貧しい国から来たから、私たちがやっけてあげなくてはならない」という考え方です。善意としてはわかるけれども、人それぞれ誇りをもっているわけで、そうしたことが留学したときのつまずきになったりもします。

ティリ それは実際ありますよ。けれども逆に言えば、そこに日本を選ぶ前提があるわけですから。向こうは先進国、私たちが知らないことを知っている。確かに、人によってはちょっと言いすぎと感ずくときもあって、感情の問題はありますけど。

北里 もう一つそれを善意に考えれば、そういうことを言っている人も留学生と交流している間に変わってくることを期待しています。

現に、ロータリアンのカウンセラーには、「一番変わったのは自分だ。そしてその次に変わったのは自分の家族だ」という人もいます。留学生だけが新しいものを学び、新しい世界を知ることではなく、受け入れた日本人もそのことで変わっていく。それが、ある意味では一番メリットになっているんです。これから米山奨学事業を見る視点、あるいは評価の基準に「われわれがどう変わったか」ということが大きな指標になると考えています。

知的国際貢献は人材育成から

鮎京 われわれもアジア諸国の法整備にさまざまな形で協力しているのですが、ある年代や立場の方々からは、昔来た道に戻ることはないかという疑問や批判が実際に出ているのです。今の北里さんのお話を伺って、その考え方と共通性があるように感じました。そういった危惧というのは全く根拠がないわけではなく、それなりに歴史的な背景があって出されていることです。十分に注意を払いながら法律面での支援をしていかなければなりません。重要なのは、法律をつくることだけに支援の視点を置くのではなく、やはりその国の人たちに自分たちの力で法律ができるような知識をもつていただく。知的国際貢献というのが今日の



宮崎 幸雄氏

テーマにもなっていますが、知的な意味での貢献というのは、人材の養成・育成に日本がどれだけ関与できるかがポイントじゃないかと思っています。

北里 特にアジアで一番大事なものは「教育」です。それは決してエリート教育でもなく、かつての植民地支配の歴史の中で押し付けられた教育でもなく、自分たちのもっている文化・価値観を生かしていく教育というのが、これからの発展、同時に世界の市民として貢献できる道だと思います。

宮崎 今日は大きなテーマにふさわしい議論となりました。鮎京先生のいわれた「知的貢献とは人材育成である」という明解な定義には勇気づけられ、将来性豊かなティリさんの姿に、優秀な学生を支援する方向性の確かさも再確認しました。また、北里さんのいわれた「われわれが変わること」の重要性、これは日本のロータリーが米山奨学事業を支援する新たな意義をご提示いただいたのではないかと思います。

本日は、貴重なご意見をお聞かせいただき、ありがとうございました。



矛盾から希望へ

米山学友 Hwang Saemee (韓国／2001-02／東京南RC)

“先入観を捨てろ!”

父親に今度のロータリー日韓親善会議でパネリストを務めることになった事、そのことを話した時、真っ先に言われたのがこの言葉でした。ここで少し父親の話を皆さんにしたいと思います。それは今回のスピーチのタイトルとも関係があるからです。

日本を好きになれない日本名をもつ父

父の名前は黄武秀たけひでです。1945年1月生まれで、それはまだ韓国が日本の植民地の時でした。当時、朝鮮半島の人々は皆、日本の植民地政策の一環として行われていた創氏改名をしなければならなかったため、父にも、武秀、“たけひで”という日本人名が付けられました。父が生まれたその7ヵ月後、韓国は独立を果たしましたが、彼の名前は依然として変わることはありませんでした。父親は彼の生まれ育った環境上、またその世代の多くの人々がそうであるように、日本に対する敵対心をとても強く抱いています。

大学の卒業後、彼はある造船所に入社し、すぐ日本の企業から招かれた技術者から造船技術を学ぶことになったそうです。もちろん日本の技術者たちとのコミュニケーションは英語でとったそうですが、彼は“日本人”に物事を学ばなければならないという現実に屈辱を感じたそうです。そこで彼は何日も何日も夜を徹して独学し、彼らから技術を学ばなくてもいいようにしてしまったそうです。しかし、その時も父は黄武秀という名前と呼ばれていたでしょう。

“人の存在 = 名前”

人間は自分の名前が他人から呼ばれることによって自己を認識しつつ、この世の中を生きて行くのではないのでしょうか。父親が生涯一度も好きになれないであろう日本と自分の日本名。皆さん。これほど皮肉なことがあるのでしょうか。しかし、その彼がまた自分の娘に言った言葉が「日本を語るときは、私から聞いてきた先入観は捨てて、自分が感じたままに語るんだよ」でした。



日韓親善会議フォーラム 左から2人目がHwang Saemeeさん

スイッチを切り替える韓国の若者たち

ところで、何年か前に韓国と日本を騒がせた“歴史教科書問題”のことを皆さんも覚えていらっしゃいますか。韓国の中・高校の歴史教科書では上下2冊のうち、1冊の半分ぐらいが植民地時代の内容です。そして歴史の先生はそれを事細かく試験問題に出します。

しかし、不思議にも「それはそれ、これはこれ」と、頭の中できれいに切り替えのコードが働きます。これがおそらく今の韓国の若い人の思考ではないでしょうか。しかしそれはなぜでしょうか。

私たちは、小学校から下校後、テレビで流される日本のアニメ「鉄腕アトム」、「銀河鉄道999」、「アルプスの少女ハイジ」、「キャンディ・キャンディ」、「母を訪ねて三千里」などに虜^{とりこ}になって、毎日夢中で見ていました。中学校、高校ではクラスではやっている漫画の3分の2は日本の漫画でした。「ドラゴンボール」や「スラムダンク」をはじめ、「ベルサイユのばら」、「北斗の拳」、「クレヨンしんちゃん」など、ジャンルを問わず数多くの漫画を読んでいました。

大学の時は、キムタク(木村拓哉)が人気になり、彼が出演するドラマを録画して、友達の間で回しながら見たりもしました。

そして最近の韓国には、以前よりもっと日本の大衆文化が入り込んでいます。日本のアニメーションやそのキャラクターになじんでいる韓国の若者たちは、プレーステーションのような日本のテレビゲームやその他のゲームを、一つの娯楽として大変楽しんでます。

韓国の若者にとって日本は敬遠される国ではない

近ごろは日本の映画の正式な輸入が認められ、高い評価を受け、多くの観客を動員しています。「ラブレター」や「うなぎ」「Shall we dance」などがその例です。

音楽の場合は、もっと以前から韓国の大衆音楽に影響を与えてきました。演歌は昔からお年よりに大変人気があり、定番のジャンルとして定着していますし、日本のポップはアメリカ音楽より親しみやすいメロディーであるため、韓国の若者たちの間で大変な人気を集めてきました。

日本語の歌詞が入っている音楽はまだ輸入禁止とされていますが、韓国の若者たちはインターネットを通じて最新のJポップの情報を得ています。そして歌曲以外では、坂本龍一や倉本祐基などが高い人気を保っています。たぶん日本語の歌詞が入っているJポップも近いうちに輸入が認められるでしょう。

ファッションも同様です。お互い体型や肌の色が似ていることから日本で流行するファッションは時間差無しに韓国へ渡ってきます。最近では日本の食べ物である寿司やトンカツなどの専門店がどこに行っても目に入りますし、コンビニではおにぎりまで売っています。



これほど日常生活の中で無意識にずっと接してきた日本の文化であるため、韓国の若者たちにとって、日本はそれほど敬遠される国ではありません。そういう若者の一人である私も日本に来る事に対して躊躇はありませんでした。

森を出て初めて森の形が見える

日本に来ることを父親に相談したとき、「お前の時代はわれわれの時とは違うんだ。森を出て初めて森の形が見えるのだ。日本には学べるものがたくさんある。いろいろな経験をしてくれなさい」と言われました。実際、私はこの日本という国でさまざまなことを学びました。

私の日本留学への決定的なきっかけをつくってくれたある日本人家族との出会い、学校での先生たちや友達からいただいた無数の助け、韓国では経験したことのない外国人としての外国暮らし。そして何よりも大きいのはロータリー米山奨学金をいただき、経済的にも精神的にも支えていただいたことです。例会ではいつもいろいろな方々から声をかけられ、私のために韓国語講座まで開いてくださったこと、カウンセラーであった中谷さんその他のいろいろな方々からの支えが今の私につながっていると思います。

皆さん。今の若者は将来の希望です。過去は過去としてしっかり受け止め、これからは未来のことに話合いませんか。時間は流れています。韓国人でありながら、一生、黄武秀という名前で生きていく、あまりにも皮肉な世代から、これから新しい関係を築いていくわれわれ若者に、時代は移り変わっていきます。

皆さん。今回の第7回会議のテーマでもあるように、われわれ新世代に力を、手を貸してください!

本稿は、2003年9月25～26日に開催された第7回ロータリー日韓親善会議:フォーラム「聞こえますか。日韓新世代の交流」でのスピーチ原稿であり、「ロータリーの友」2004年2月号に掲載されたものです。

龍の里で陶芸に賭ける

ツアン イーミン
米山学友 張 義明

(台湾/1997-99/和歌山城南RC)



張義明さんは新進気鋭の陶芸家として、また中学、高校の美術講師として、和歌山県龍神村を舞台に活躍する米山学友です。昼間は村内4つの学校の授業を回り、夜は創作活動にいそむというハードな毎日を送る傍ら、「一人でも多くの人に陶芸の魅力を伝えたい」と、小学校や老人ホームの陶芸クラブにもボランティアで指導に訪れています。張さんの影響も手伝って、村は陶芸ブームにわき、中高生の陶芸展も開催されるようになりました。

「イー・ミン先生」と慕われる彼の活躍は、地元紙にもたびたび取り上げられています。これまでに数々の陶芸コンテストで賞を受け、昨年10月には念願の個展を開催するなど、若手陶芸家としても着実に実績を積み重ねていますが、ここに至るまでの道のりは、決して平坦なものではありませんでした。「何事もあきらめずに走り続ければ、必ず何かが見えてくる」と、穏やかなかにも不屈の精神をのぞかせる張さんに、お話をうかがいました。

陶芸との出会い

私が初めて陶芸に出会ったのは、京都教育大学で美術を専攻していた大学4年の春のことです。授業で初めてろくろを回したときの感動が忘れられず、私は独学で陶芸を学び始めました。多くの芸術分野の中でも、陶芸は、人間の力と自然の力を融合させて初めて完成する、極めて難しく奥深い芸術です。だからこそ挑戦する喜び、窯から命が生み出される瞬間の感動は大きく、知れば知るほど、その魅力は私をとらえて放しませんでした。

陶芸の勉強をするために、私は進学を決め、京都の高名な陶芸家を教授に擁する和歌山大学大学院を受験して、合格することができました。さらに幸運なことに、米山奨学

生にも採用されて、すべてが順風満帆に運び、希望に満ちて、入学する日を待ちわびていました。

不慮の事故に遭って

そんな矢先、悲劇は突然やってきました。卒業式の日、バイクで大学に向かう途中、居眠り運転で猛スピードのまま逆走してきた車にはねられ、私はひん死の重傷を負ったのです。幸い命は取りとめました。両手、両足、肩、骨盤を複雑骨折した私は、主治医から「もう陶芸は一生できないかもしれない」と宣告されました。陶芸には、手の機能はもちろん、土をこねるためには足腰の踏ん張りもとても大事なのです。事故のために歩くこともままならない体になって、陶芸に賭け

る夢までも絶たれて、私の心は絶望の淵^{ふち}に沈みました。

そこから這い上がってこれたのは、やはり、どうしても夢をあきらめられなかったからです。「なんとか陶芸の道に進みたい。大学院で思いきり陶芸の勉強をしたい」と、その一念で、つらいリハビリに耐え、手術を受けるための入退院を繰り返しつつも、回復のためにあらゆる努力をしました。それと並行して、病院から大学院に通うことで、陶芸の勉強をスタートさせました。これまでの人生で一番つらかったこの時期に、とりわけ温かく励ましてくださったのが、世話クラブの和歌山城南ロータリークラブの皆さんだったのです。

ロータリーとの出会いで生まれたもの

病院には、事務局の方も含め、クラブの皆さんが代わる代わる見舞いに訪れ、元気つけてくださいました。外出できるようになってからは、米山カウンセラーの瀧口博士氏が車で迎えに来てくださって、病院から例会に通うこともありました。体も心も一番苦しかった当時、皆さんが寄せてくださった純粹で温かい気持ちは、どれほど私の心を慰め、励ましてくれたことか、言葉では言い表せないほどです。

事故は私から多くのものを奪いました。加害者の心ない対応に人間の醜さも見せられましたし、体の自由も完全には戻りませんでした。今でも後遺症に苦しんでいます。けれども、あの事故から、私はあらためて人間のすばらしさを知ることができました。そして、あの事故をきっかけに、「何事もあきらめずに走り続ければ、必ず何かが見えてくる」という思いが、強い信念へと変わり、私を支えてくれたのです。

多くの方々のお世話になって、私はここまで立ち直ることができました。本当に心から感謝しています。その一人ひとりに直接恩をお返しすることはできませんし、それは必ずしもその方々が望むことではないでしょう。ならば、違う形でお返ししよう、自分のもっているもので、ほかの人が必要とするものがあれば、それを提供することでお返ししたい、どんなに忙しくても、村の陶芸教室や陶芸クラブの指導を一切無償で引き受けるのは、それが私にできる恩返しの形だからです。米山奨学生当時、地区の行事で米山梅吉氏のお墓参りに連れていってもらい、墓前で「米山先生ようになります」と自然と誓っていました。今でもその思いは変わりません。

夢は龍神村とともに

大学院を卒業後、龍神村の中学校、高校の美術講師に着任し、早いもので今春で丸3年になります。現在、村内4つの学校の美術の授業を担当していますが、子どもたちが陶芸を通じて、創造の楽しさや喜びを知り、物を大事にする心を育てていく様子に、大きな喜びを感じます。これからもすべての創作活動の前提となる「感じる心、感動する心、感謝する心」の大切さを子どもたちに伝えていきたいと思っています。さまざまな土地でさまざまな経験をしてきた私ですが、不思議な縁に導かれて、ようやくこの地にたどり着いたような気がしています。龍神村は「芸術家を支援する村」としても知られていて、私のほかにも多くの芸術家がこの地に魅了され、移り住んでいます。この村をベースに創作活動を続け、自分の作品がどこまで人を感動させることができるか、自分の力を試したいと思っています。

そして、いずれは「龍神焼」という窯元をつくりたい。それが私の目下の夢です。この村から世界に通用する作品を発表できるようになって、芸術の発信地としての龍神村をアピールする役に立つことができたら、そして、ゆくゆくは、陶芸を通じて日本と台湾の懸け橋になることができれば、これに勝る喜びはありません。私にとって第2の故郷ともいべきこの龍神村を舞台に、これからも感謝の気持ちを忘れず、一所懸命、自己研鑽^{けんさん}に努め、陶芸家として、また一人の人間として、成長を続けていきたいと願っています。



龍神村の学校で陶芸を教える張さん

本稿は、「ロータリーの友」2004年3月号よねやまだよりに掲載されたものです。

卓話で知る学友の心

米山奨学生としての自分を振り返って

チン ショウナン
米山学友 陳 曉楠
(中国/2002-04/東京恵比寿RC)

東京恵比寿ロータリークラブのクリスマスパーティーにて
陳曉楠さん(前列左から2人目)と米山カウンセラーの波多野さん(前列右から2人目)

身近な人から感じた日本への親しみ

私が生まれたのは、中国の東北地方にある黒竜江省ハルビン市です。日本の皆さんには、旧満州として良く知られています。その後、両親の仕事の都合で、2歳から上海で生活するようになりました。

私が留学を決意したのは、高校生の頃でした。中国以外の世界を見たいという単純な思いからでしたが、日本を留学先を選んだのは、日本人に対して親しみを感じていたからだと思います。ハルビンには、戦争で残された日本人残留孤児の方がたくさんいました。私の叔母もその1人です。3歳で私の祖母の養女になった叔母は、日本人であることを知らされてから、日本語の勉強を1日たりとも怠ったことがなかったそうです。日本に帰国した後も、ハルビンの養父母や兄弟たちとの間で、常に深い絆で結ばれています。

また、上海の小学校では、父親の海外赴任に伴って上海で教育を受けることになった日本人の男の子と数年間一緒にクラスになりました。暖房のない寒い冬の日のショート

パンツ姿や、まったく分からない中国語を懸命に覚えようとする姿勢は、今でも鮮明に覚えています。

このような個人的な経験から、私が日本に対して抱いたイメージは、教科書で習った戦争の歴史だけではなく、どんな厳しい環境の中でも、優しさを忘れずに力強く生き抜く民族性そのものでした。そのイメージはいつしか、「日本という国を自分の目で見たい」「自分の肌で感じたい」という思いに変わりました。

服装学に魅せられて

日本に来てからは、まず日本語学校と法政大学の経済学部で勉強しました。上海では、外国語は英語しか勉強したことなかった私にとって、日本語はまさに“別の世界”で、本当に困りました。でも今では、上海の大学で英語を教えている母から、たまに英語の発音が日本語っぽい指摘されることもあります。

経済学の勉強も大変役に立つものでしたが、日本語の“手

に職”という言葉に共感し、技術であり、学問でもある服装学に魅せられて、文化女子大学服装学部に入りました。実際の勉強生活は、思ったより大変で、決して興味だけでやっていけるものではありませんでした。学問としての理論と知識はもちろんのこと、衣服の構成を理解するために、すべてのアイテムを自分で作らなければなりません。振り返ってみると、課題のない週末はほとんどなかったような気がします。

学部で衣服のデザインと構成について学び、さらに大学院に進学して、服飾文化や服装産業について研究したいと考えていた時、大学からの推薦で米山奨学金に応募する資格をいただきました。幸運にも米山奨学生に選ばれたのは、大学院入学とほぼ同時でした。奨学金をいただいたおかげで、2年間研究に集中することができ、この春オールAの成績で修士課程を卒業しました。何より、留学期間が長く、日本での生活にもほぼ慣れていて私でしたが、ロータリアンの方々との出会いによって、人と人の触れ合いや思いやりの大切さについても、あらためて考えさせられました。

米山奨学生として学んだこと

東京恵比寿ロータリークラブでお世話になっていた私は、常に多くの会員の皆さんに励まされ、親切にいただきました。例会出席だけでなく、日本の文化をより理解できるよう、米山梅吉記念館の見学や正月の餅つき大会などにも参加させていただきました。

特に、私のカウンセラーだった波多野さんは、時には優しいお姉さんのようであり、時には親友のようでもありました。私が部屋探しをしていた時、自ら進んで保証人になってくださり、面倒な手続きも文句一つ言わずにしてくださいました。就職のことで相談したときには、長い時間をかけて、さまざまな可能性や対応方法を一緒に考えてくださいました。忙しい仕事の合間を縫って、多彩な趣味をもち、世界の子供たちのためにボランティア活動も続けている波多野さんは、私にとっては、カウンセラーという存在を超え、まさに女性としての目標でもあります。この出会い、そして多くのロータリアンの方々との出会いをこれからも大切にしていきたいと思っています。

そのほかにも、人生観や世界観について深く考えさせられたのも、私にとっては得るものが大きかったと言えます。

在籍中、ロータリアンの皆さんを見習って、私も何度かボランティア活動に参加しました。それまで、ボランティア活動に対しては、自分が関心を持つかどうか、その中で楽しめる

かどうかを参加の基準としていましたが、ロータリアンと接しているうちに、それは本当のボランティア精神とは異なるものだと感じました。面白そうだと思わなくても、自分にとって多少の負担であっても、人のため、社会のために進んでやることこそボランティア活動であり、ボランティア精神であることを教わりました。



また、人は成功と呼べるものを収めなくても、自分の好きな職業や自分に合う職業に就き、楽しく生きていけば良いとされるのが最近の風潮ですが、ロータリアンの皆さんの現状に満足せず更なる向上を目指そうとする姿は、私に多くの感動と刺激を与えてくれました。自分の周囲のことだけでなく、いつも社会や世界に目を向けている姿勢に感心させられると同時に、自分のこれからの生き方も影響されるに違いないと実感しています。

母国と日本に同時に貢献できる道を目指して

大学在学中、将来は自分の専門や研究を生かして、生まれ故郷の中国と、成長させてくれた第2の故郷である日本に同時に貢献できることを望んでいました。修士論文では、研究分野としてそれまでに上げられなかったことのない「中国における日本女性ファッション誌の進出と動向」をテーマに選びました。これをきっかけに、情報収集のため取材に訪れた出版社「主婦の友社」から仕事のオファーもいただきました。今は、同社の経営戦略部国際室で、女性向けのファッション雑誌や実用ジャンルの書籍の海外版權の販売を担当しています。経済発展とともに生活にも潤いを求めるようになった中国は、やはり今最も大きな市場であると感じつつ、忙しく仕事をしながら充実した日々を送っています。

これからは、日本のノウハウと消費者に対する細やかなケア、中国の広々とした市場と人々の向上心をお互いにいい形で補足し合い、双方に利益をもたらすような仕事をしていくことが私の課題であり、目標でもあります。そしてなにより、米山奨学生であった誇りを心に刻み、皆様のご厚意に応えられるような生き方をしていきたいと思っています。

本稿は、2004年6月の東京五反田RCでの卓話原稿です。

見守るロータリアンの“声”

活躍する米山学友……そして、その陰には温かく見守るロータリアンがいます。世話クラブ・カウンセラー制度をもつ米山奨学事業だからこそ、奨学期間終了後もつづく交流の縁。米山奨学事業の主役は、優秀な奨学生と、その成長と活躍をわが事のように喜びながら見守るロータリアンなのです。

元米山奨学生からの手紙

高槻東RC 堀江 義明

4年ほど前に米山奨学生だった韓銅珍君から便りが来た。彼は韓国から来日して、大阪大学の工学部で大阪湾の水質の研究をし、博士号を取得して修了したのである。クラブとはその時点で縁が切れてしまったが、私とは年賀状でのつき合いが続いていた。

たいへん誠実な人柄で、奨学生だった当時、会員からも好感をもって迎えられ、日本に来て「大相撲」に興味をもった彼を、大阪場所の砂かぶり席へ連れていった会員もいるし、私は、お別れのときに彼の一粒種のお嬢さん(当時2歳だったか)に雛人形をプレゼントしたのであった。

彼はいずれ母国に帰り、研究者となる人材だと私は思っているが、「もうすこし日本で実績を積んだ方がいい」という指導教授の助言により、日本で就職し、仕事の傍ら学会誌に研究成果を発表していたらしい。

今回の報告は、このほど発表した彼の論文が、日本国内で2003(平成15)年度の土木学会論文賞を受賞することになったとのうれしい知らせである。

私は、早速彼の家へ電話をした。電話口に出た彼は、まず奨学金のおかげで研究時間にゆとりをもてたことへの謝意を述べ、「相撲に連れていってもらって以来、テレビですっと見えています」と言い、「3月になると娘のために雛人形を飾っています」と続けた。誠実な人柄は少しも変わっていないなと私は思った。

「5月28日(平成16年)に東京で表彰式なんです」という彼に、「クラブのみんなと一緒に祝いたいから、時間を見つけ、例会に来て表彰状を見せてくれないか」と私は言った。

その表彰式から2週間後の6月11日、彼は約束通り例会に訪れ、受賞の喜びを報告するとともに、クラブの会員たちとの再会を楽しんだ。

それから数日後のこと、私のほか、彼と特に親交のあった2人の会員とともにお祝いの食事会を開いた。彼の美しい夫人、幼稚園の年長組になったというお嬢さん、そして、その後生まれた坊やを招き、彼が学生だった当時のことや今の生活の様子など、さまざまなことを語り合った。

論文賞がきっかけになったのであろう。彼にはいくつかの会社からヘッドハンティングの誘いもあったそうだが、彼にはむろん会社を変わる意志はないが、社長に話すと「韓国に帰るなら仕方ないが、よその会社へ行くことはならん」と一蹴されました、と彼は笑っていた。

また、去年の暮れに、私が体調を崩して入院した際に見舞いにきてくれた彼は、ベッドの横でこんなことをいった。

彼は年に1、2回帰国するのであるが、「父は私の顔を見るたびに、米山奨学金を貰ったことが、おまえの人生にどれだけの重みをもつものか、お前は一生忘れてはいかんと言うのです」と。「この親にしてこの子ありだな」と私は改めて思った。

60代も後半に入り、だんだんと感激する感性が鈍くなってきたと感じていた私だが、久しぶりにうれしかった。心の中が温かくなった気がした。



米山学友 韓銅珍さんとその家族

ハンフィー 米山奨学生・韓霏君を訪ねて

豊田RC 齋藤 直美

ゴールデンウィークを利用して、米国のトーマス・ジェファーソン大学の研究所に留学中の韓君を家内と訪ねた。彼は天津大学医学部卒業後、名古屋大学医学部整形外科に留学。米山奨学生に選ばれた彼のカウンセラーを小生が引き受けることになった。

人懐こい笑顔で、上手な日本語を使いこなす中国の若い医師は、卓話を2回担当してくれた。1回目ときには「僕は天津生まれですが、天津には天津飯や天津甘栗はありません。どうして日本にあるのでしょうか」と、例会場の人を笑わせた。以来、彼はクラブの人気者になって、大勢のメンバーと交流を深めていった。

優秀な彼は2年間で学位論文を書いたが、外国専門誌の掲載が1年遅れたために、学位認定書の発行は3年目となってしまった。学位取得のお祝いに、もらえるはずの米山奨学会からの時計はもらえなかった。とても楽しみにしていたのだが……。

その後、韓君は帰国することなく、トーマス・ジェファーソン大学の研究所に助手のポストがあるからと旅立った。このままでは、米山奨学金制度に、ひいては日本に不信感をもたれてしまうと思った当クラブの有志は、お祝い金を贈って励ますことにした。小生はそのお祝い金をもち、2000年12月20日、フィラデルフィアへ飛んだ。メッセージを伝える僕に、彼は涙を流した。

あれから3年5か月、彼は結婚し、男の子を授かった。4か月になるその子・天任ちゃんに、日本のかぶとと鯉のぼりをお祝いに贈るためのゴールデンウィーク旅行だった。

5月1日、ニューヨークのホテルまで車で迎えに来てくれた。そこからハイウエーを走ること70分余でフィラデルフィアに到着。かつて独立宣言の発せられた街は、こざっぱりとした赤レンガ基調の美しい街並みが印象的だった。

郊外のお宅で天任ちゃん、奥さまとそのお母さまに迎えられた僕らは、しばしの歓談に笑いが絶えなかった。居間の日本製のカレンダーは「卯月」のままで、指をさす僕に、奥さまは慌てて1枚めくり、「皐月」とした。このカレンダーは日本文化に詳しい、北京生まれの奥さまの購入によるものとか。

昼食時、彼は「中国から来る留学生の空港からの車代とその晩のホテル代を支給する基金」を、妻と2人で設立するつもりだと語ってくれた。せめてもの恩返しというのだろう。すばらしい米山奨学生のカウンセラーにさせていただいたと、胸を熱くして帰途についた。



米山学友 韓霏さんとその家族

奨学生との出会いを与えてくれた米山奨学制度に感謝

北条RC 重見 誠吾

私がカウンセラーを務めたネパール出身の米山奨学生、ラム・チャンドラ・ブサルさんが、帰国後に学術功労賞を受賞し、ネパール国王からメダルを授与されました。ブサルさんは、愛媛大学で柑橘についての研究を続け、見事に農学博士号を取得して2003年に帰国。ネパールでは、農林水産省の研究職に就き、その将来を嘱望されています。

カウンセラーとして今まで4人の男子奨学生をお世話してきました。私には息子がいないので、自然と息子がいたらこんなふうにつき合うのかな、といった交流をもちました。修士2年次に米山奨学生となったブサルさんは、愛媛県での国際交流にも積極的に参加し、地元紙にも大きく取り上げられ、私は鼻高々でした。また、夫妻でクラブのイベントにも参加し、会員に生きた国際奉仕を実感させてくれました。会員一同のブサル夫妻への好意は、ネパールから夫妻の3人の娘さんたちを日本に招待するという、大きなプレゼントになったほどです。このような交流の成果でしょうか。下手だった日本語会話が、奨学期間終了のクラブでのお別れの挨拶で、私を涙ぐませるほど上達していました。

私の宝は、韓国、中国、マレーシアそしてネパールに生きています。ネパールでブサルさんがまず大輪の花を咲かせました。うれしさと誇りに思う気持ちで一杯です。彼らとの出会いを与えていただいた米山奨学制度に感謝しています。



ネパール国王から勲章を受ける
ラム・チャンドラ・ブサルさん

6 米山学友会の紹介

米山学友会は、学友と現役奨学生によって組織される米山奨学生の同窓会組織です。現在、日本国内に23、海外に2（韓国・台湾）の計25の米山学友会があります。

学友会によって活動内容は異なりますが、地区米山奨学委員会やロータリアンと連携して、交流を深めるさまざまなイベントを企画し、活動しています。米山学友によって自主的に運営され、ロータリアンおよび米山奨学会が協力・支援しています。

TOPIC 1 社会貢献へと進化する学友会活動

学友会活動は、地区と連携した親睦・交流活動が主体ですが、最近では、学友らが自分たちの力を生かして社会に貢献しようという取り組みも増えてきています。

2003年10月には、国内の7学友会が連携して、「平和と国際貢献における留学生の役割」をテーマに「第1回米山奨学会学友セミナー」を開催しました。企画の目玉として実施した外国人留学生対象の懸賞論文では、国内外から300件近い応募があり、セミナー当日は、外務省、(財)日本国際教育協会(当時)の後援を得て、米山奨学生・学友、ロータリアン、一般留学生・社会人など約150人の参加者を集めました。懸賞論文入賞者によるパネルディスカッションや、平和学の基調講演を通じて、留学生の主張や意見を交換し、留学生の知的存在感と社会参加の意欲をアピールする機会となりました。

また、第2780地区(神奈川県)米山学友会では、2005年6月5日に、シンポジウム「新しい地域社会への提言—国際共生への道—」を国際ロータリー第2780地区と共催で開催しました。「在日留学生・外国人も地域の一員として、日本の文化・慣習に溶け込みながら、それぞれの個性を生かした役割を果たすべきである。国際共生への道を求めて、新しい地域社会の望ましい姿をみんなで話し合おう」という趣旨のもと、米山奨学生・学友のほか、地域の中学校の教師や父兄も参加して実施されました。



TOPIC 2 台湾学友会の躍進

台湾の扶輪米山會(ロータリー米山会)は、1997年に台湾国内で社団法人の認可を得て、現在は4つの支部を持つまでに拡大しています。台湾の学友会は、ロータリアンになった会員も多く、ロータリーとの結びつきが強いのが特徴です。社団法人中華民國扶輪米山會の初代理事長となったのは、徐重仁氏(P.8参照)。台湾初の米山学友出身ガバナー、許國文氏(P.8参照)も、台湾学友会の精力的な会員の1人です。



学友会活動



2760地区（愛知県）
民族衣装を着て忘年会



2780地区（横浜市・川崎市以外の神奈川県）
足柄RC主催の国際交流
ファッションショー

学友会活動



2790地区（千葉県）
蕎麦打ち体験



国際ロータリー
2004年国際大会
（関西）での
語学ボランティア参加
（関西学友会）

懸賞論文募集の
お知らせ

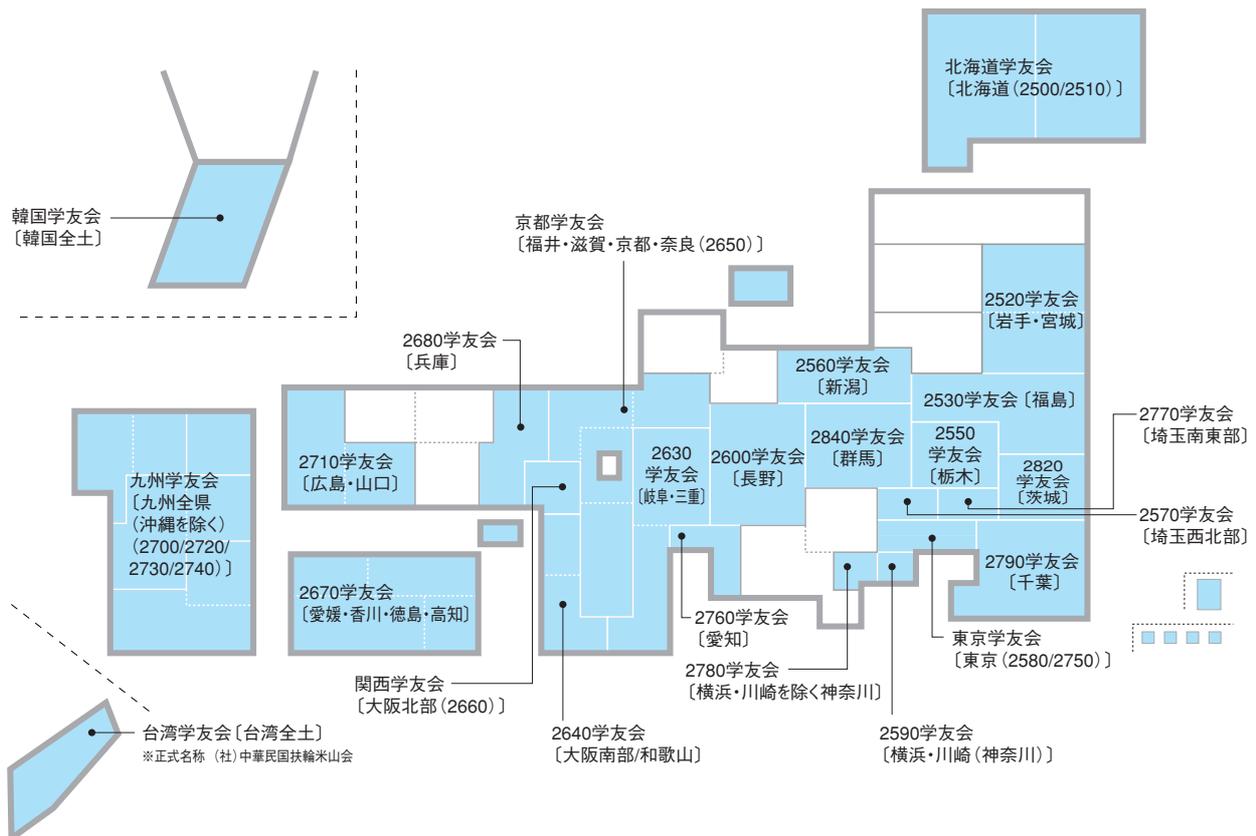


2710地区（広島県・山口県）
PG筒井数三氏経営ポンプ工場見学



学友会会報

米山学友会一覽





財団法人ロータリー米山記念奨学会

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-3 abc会館ビル8F
Tel:03-3434-8681 Fax:03-3578-8281
ホームページ <http://www.rotary-yoneyama.or.jp>

<2005年9月より下記住所に移転>

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-15 黒龍芝公園ビル3F
(電話番号・FAX番号・ホームページアドレスは変わりません)



RYS.15T.05-6